

## 宮沢賢治と近角常観

### ―宮沢一族書簡の翻刻と解題

岩田 文昭\*・碧海 寿広\*\*

\*社会科教育講座

\*\*財団法人国際宗教研究所宗教情報リサーチセンター

(二〇一〇年三月二十九日受付)

#### 緒言

宮沢賢治一族と真宗大谷派の僧、近角常観との間には密接な関係があった。近角の布教の本拠地であった求道会館から発見された、宮沢一族からの二十通の書簡は、その具体的な関係をよく示している。その書状の中で、とくに賢治の妹トシ発の二通の書簡が注目に値する。真宗の信仰を獲得ことができないという悩みを、彼女が告白しているからである。賢治が真宗の信者から法華経の行者になったとき、トシはいち早く賢治にしたがった。この書状の存在から、今後は、賢治からトシへの一方的感化があっただけではなく、トシの中に存在していた精神的空白に賢治が呼応したという面を考慮する必要性が認められる。

キーワード・浄土真宗、法華経、知識人青年、告白

宮沢賢治(一八九六―一九三三)の父、宮沢政次郎(一八七四―一九五五)が浄土真宗の熱心な信徒であったことはよく知られている。特に、暁烏敏(一八七七―一九五四)という、真宗大谷派の改革僧に師事していたことは、彼が暁烏に送っていた数多くの書簡などが証明するところである。<sup>(1)</sup>

政次郎とその妻イチ(一八七七―一九六三)をはじめ、宮沢一族には真宗の信仰が広く共有されていた。賢治が、そうした真宗信仰の世界からの離脱を試み、法華経の行者としてひとり立ちをしたというのも、同じくよく知られた話である。

だが、この宮沢一族の人々が、近角常観(一八七〇―一九四一)という、やはり真宗大谷派に属する革新的な僧侶ともかなり密接な付き合いがあったという事実は、今のところあまり知られてはいないだろ

う。両者のあいだに一定の交流があったこと自体は気づかれていたが、それがどのような関係であったのか、詳しく実証するに足る資料はこれまで皆無に等しかった。

筆者らは、二〇〇八―二〇一一年度の科学研究費補助金・基盤研究(C)「近代化の中の伝統宗教と精神運動——基準点としての近角常観研究」(研究代表者・岩田文昭<sup>2)</sup>)の一環として、近角が自己の布教活動の拠点としていた求道会館(東京都本郷区)から発見された、近角の関連資料の整理と分析の作業を進めてきた。その資料の中心を占めるのが、約一万通に及ぶ数の書簡であるが、その中からは、宮沢一族の人々から近角のもとに送られてきたものも複数、発見された。現在確認されている限りでは、政次郎が十二通、イチの弟である磯吉(二八八九―一九七二)からの書簡が三通(ただし一通は封筒のみ)、イチの父である善治と、イチの弟である直治、磯吉による連名の年賀状が一通、イチの妹で善治の三女セツとその夫である梅津善次郎からの年賀状が二通、そして賢治の妹として著名なトシ(一八八九―一九二二)による、やや長文の手紙が二通ある。誠に残念ながら賢治自身によるものは発見されておらず、また個々の書簡ごとに内容の濃淡はあるにせよ、いずれも宮沢一族と近角との具体的な関係を明らかにする上では、第一級の資料であるといつてよい。

本稿では、これら宮沢一族から近角のもとに送られた書簡を翻刻し公表するとともに、資料解読の便宜のため、書簡の内容に関する若干の解題を付す。翻刻については、くずし字の文字を解読するという、筆者らにとつては不慣れな作業への挑戦でもあったため、判読不能の部分も多少あり、そこは「□」と表記してある。とはいえ、書簡の内容を理解するのに支障をきたすほどの欠損ではなく、資料としての重要性を鑑み、ここに公表する運びとなった。拙文の解題と共に、関心のある向きの研究に資するところがあれば幸いである。

## 翻刻

### 注記

- ・整理番号は年月日順による通し番号。
- ・字空き、行変えは、翻刻者による判断。
- ・判読困難な箇所は□と表記。

### 宮沢政次郎

1 明治三十七年八月廿三日 求道発行所宛 封書

《表》 東京市本郷区森川町一番地 求道発行所御中  
《裏》 八月廿三日 陸中国花巻川口町 宮澤政次郎

拝啓御社御発行之求道購読仕度左ノ通御送金仕候間御發送被来下候様  
奉願上候

・金壹拾六銭 十二部分代価及郵税  
右ノ通御受取ノ上初号ヨリ取揃御發送之程奉願上候  
但シ(六号一部ヲ除ク)先ハ右為替券相渡御佐願上候

草々字候

八月廿三日

宮澤政次郎

求道発行所御中

2 明治四一年六月二日 近角常観宛 葉書

《表》 東京市本郷区森川町一番地二四三 求道学舎ニテ 近角先生  
陸中国花巻 宮澤政次郎

拝啓

過般滞在中参上ノ節ハ萬々御厚情ヲ蒙リ難有仕合奉感謝候

昨朝拝顔仕度ハ□々□分之候所用事都合ニテ午前八時五十五分発ニテ

帰宅仕候間何卒御休相成下度奉願上候

尚奥様御令弟様ニモ宜敷御伝声奉願上候

先ハ右御報旁御礼申上度迄

始光御重草々

六月二日

3 明治四一年六月二九日 近角常音宛 葉書

《表》 東京市本郷区森川町一番地二四三求道学舎 近角常音様

六月二九日 陸中国花卷川町 宮澤政次郎

梅雨之候御揃登々御清健御事大慶ニ奉存候

二十六日発先生ヨリ御紙面被候正シ拝誦八月十三日ヲ以テ下地御立寄

被下候趣御多忙時間御割愛被下候御事奉謝候 夫々知音へ通知致シ御

日指シ異存無之候間右宜敷先生へ御申通奉願上候 万一右変更相成ル

若の事アラバ左ハ念ノ為メ迄願□候 田舎ハ旧盆ニ差掛リ候教若シ御

変更ノ際ニハ何卒右八月十三日以後ノ處ニ御決定被候様御含迄願上候

尚下地着ノ時間若モ御決定次第前以テ御為知被候度奉願上候

先ハ右御候 受道草々

4 明治四一年八月八日 近角常音宛 葉書

《表》 東京市本郷区森川町一番地二四三 求道学舎 近角常音様

八月八日 陸中国花卷川町 宮澤政次郎

大暑之候ニ候處報恩行ノ御身益々御健勝ニ御過シ被遊候御事慶賀至極ニ奉存候

陳者下地御巡錫願上候十三日モ間近ニ付打合セノ為メ左ニ申上至候

一 十三日(午前九時三十七分当地着直行 貴地十二日午後八時

三十五分発海岸線廻リ) 御着ノ事ニ御待受可被候事

一 宿所ハ宮澤直治氏方ニテ(御一泊相願ヒ) 御待受奉事

一 御法話ハ十三日午後ヨリ二席御願仕ル事(光徳寺)

右之通りニテ準備仕度事申出テ□間若御都合悪変節ハ申出被下度本願上候

5 明治四十二年一月一日 近角常観宛 葉書

《表》 東京市本郷区森川町一番地式四参 近角常観先生

陸中国花卷 宮澤政次郎

謹賀新正

平素御無沙汰にのみ打過候事を謝し奉り併て向後益々御栄励あらん

事□祈申候

四十二年元旦

敬具

6 明治四三年一月一日 近角常観・夫人宛 葉書

《表》 東京市本郷区森川町一ノ二四三 近角常観様 令夫人様

陸中国花卷川町 宮澤政次郎

謹賀新年

昨年中御厚情御栄励ヲ蒙リ□分奉深謝候  
向後尚御引立ノ程奉願上候

尚御一家御清福□裕□シ下り祈り候  
一月元旦

7 大正二年一月一日 近角常観宛 葉書

《表》 京都市本郷区森川町一ノ二四三 近角常観様

謹而奉迎諒闇新年

昨年中種々御芳情ヲ賜ハリシ事奉感謝候

大正貳年一月元旦

陸中国花卷川町 宮澤政次郎

8 大正四年四月二日 近角常観宛 封書

《表》 本郷区森川町一二番地ノ二百四十三 近角常観先生

《裏》 四月貳日 陸中国花卷川町 宮澤政次郎

久敷御無沙汰ニノミ打過居り候事御申訳モ無之候

何時カ上京親敷拜顔候上御詫申上候ト存ジナガラ遂ニ未ダニ果シ兼居候  
今回私長女登志ト申モノ貴地女子大学ニ親戚ノ者ニテ先年ヨリ修学ニ  
来り居候ニヨリ今年ヨリ其手引ニテ暫時厄介ニ相成ル都合ニ候處何分  
東西モ分ラス初メテノ出京ニ候間精神方面ノ修養トテモ是レヨリノ事  
ニ有之何卒今后御迷惑ナガラ御懇ノ御指導偏ニ奉願上候  
先ハ久々御無沙汰御詫尅旁々御願迄申上候

草々敬具

四月貳日

宮澤政次郎

近角先生

御座下

尚此状持来御伺申上候常私妹ニテ岩田ト申スニ嫁シタルト寄宿舎ノ先  
輩同様スルヤトモ存知間何分宜敷御願申上候

9 大正四年六月三日 近角常観・夫人宛 葉書

《表》 京都市本郷区森川町一番地ノ二四三 近角常観先生 同奥様

六月三日 陸中国花卷川町 宮澤政次郎

何時モ御無沙汰ノミ申上候□御詫申上候

先生ニハ益々御健勝為道御参誅被遊候御事感謝之至り奉存候  
私モ家事ノ都合により四十三年来出来しえる事なく拜顔の榮を得度思  
いつ、果し兼居候

此間ハ又登志来上種々御手厚き御懇情を給り候趣殊ニ有難き仕合と本  
存候 何分我儘な子に候間此上とも御教訓の程本願上候

草々

10 大正五年四月二十四日 近角常観宛 葉書

《表》 京都市本郷区森川町一番地 近角常観先生

陸中国花卷川町 宮澤政次郎

春酌ノ季節ニ有之候所先生初メ皆様益々御清健御暮シ被遊候御事大慶  
之御事奉存候

宮澤政次郎

毎度御無沙汰ノミ申上居候事深ク御詫申上候

数年上京仕候事□無之折り得テ拝願仕度ト存居候 此度ハ又会館落慶

ノ御紀念トシテ上人御真蹟御惠贈被下難有奉謝上候

□□御礼旁御無沙汰御詫迄申上候

草々

四月二十四日

11 大正五年五月一日 近角常観宛 葉書

《表》 東京市本郷区森川町一ノ二四三 近角常観先生

五月十五日 陸中国花巻川町 宮澤政次郎

事一日去久し振りに御高来被下候處御粗勿にのミ打ち候事恐縮之至り  
奉存候 殊に御帰郷の御見送りに止むなき障リユエ仕候ず候事深く御  
詫申上候 御機嫌能く御帰京之事承ハリ喜上申し候  
偕去際ハ御寸暇もなき先生に心なき御揮毫の御願仕候所何分老人と病  
人の事に候間慰安を御與へ被候覚召にて本文つよく御下賜被下候様偏  
に奉願上候 先ハ御詫旁御願迄

草々

12 昭和一四年一月一日 近角常観・家族一同宛 葉書

《表》 東京市本郷区森川町一ノ二四三 近角常観様 御家族皆々様

謹賀新年

益々御健在奉折上候

十四年元旦 岩手県花巻町

宮沢善治・直治・磯吉

1 明治四三年一月一日 近角常観宛 葉書

《表》 東京本郷区森川町一 求道学舎 近角先生

陸中国花巻 宮澤善治 直治 磯吉

御光の下目出度御家内様御無事御越奉の儀こゝに御祝申上候  
向後本御引立の程願上候

宮沢磯吉

1 ?<sup>(3)</sup>年九月四日 近角常観宛 葉書

《表》 東京本郷区森川町一 近角常観様

九月四日 相州箱根仙石原 仙郷楼方 宮澤磯吉

其後ハ甚だ御無沙汰御申上候 八月中沼津に留まる考に御座候處彼地  
は夜眠られぬ程暑き故八月上旬より当温泉に参り居り候 人の淋しが  
る山中に一人隠遁致し居り候ときもなかくに□分念仏致し居り候 い  
づれ般途の砌は亦御教示願上候

2 明治四十二年六月四日 求道学舎宛 封筒(書簡紛失)

《表》 東京本郷区森川町壱番地 求道学舎御中

《裏》六月四日 岩手県花巻川口町 宮澤磯吉

梅津善次郎・セツ

3 昭和十四年六月二十一日 近角常観・夫人宛 封書

1 明治四十三年一月一日 近角常観 葉書

《表》東京市本郷区森川町一 求道会館 近角常観先生 ヶ御奥様  
《裏》六月二十一日 岩手県釜石市只越 宮澤磯吉

《表》東京本郷区森川町一―一 近角常観先生  
陸中花巻川口町 梅津善次郎 節

拝啓 初夏之候御起居如何被成遊候や御伺上候 再来一向に御無沙汰  
にのみ打過ぎ申候あり平に御海容被成下度候 扱愚息長男金之助目下  
岐阜薬学専門学校第三学年在学に候て来春卒業を控へ今夏休み中（七  
月中旬より八月中）東京帝大病院及び順天堂病院に見学写真の事に相  
成たる趣に御座候處今期間中甚だ恐縮乍ら求道学舎に置いて頂くこと  
御願ひに御座候や 尤も今期間中ハ夏休み之事とて求道学舎に居ら  
るゝ学生の皆様は帰省学にて随分賄方の人も留守となり自然学舎御閉  
鎖の場合は御願はざる儀と存上候（□若し夏休み中と雖も何人かの学  
生の方が学舎に居残られ且つ賄方の人も居らるゝ場合は右期間中愚息  
学舎に置いて頂くこと出来ますや否や 甚だ恐縮に御座候やも此状着  
次第御返事賜り度御願申上候

忽々 頓首

六月二十一日

釜石市  
宮澤磯吉

明治四十三年 謹賀新年 一月一日紀念  
陸中国花巻川口町

梅津善次郎

2 大正八年一月一日 近角常観 葉書

《表》東京本郷区森川町一 求道学舎 近角常観様  
岩手花巻川口町 梅津善次郎

謹賀新年  
併て平素の疎遠を謝し  
猶ほ将来の厚誼を祈る  
大正八年一月一日

岩手県花巻川口町  
梅津善次郎

近角常観先生

御奥様

宮沢トシ

1 大正四年四月二三日 近角常観宛 封書

《表》市内本郷区森川町一番地二百四十三 近角常観先生  
 《裏》四月廿三日 東京小石川区日本女子大学 責善齋 宮沢と志

御高名を兼ねて父母その他親類共より承はりその御教へ受くる一人に私もなりたきものとは疾くよりの私が願望に御座候。今はからずも御縁有らせていただきこの拙きもの認むる身となり候ひしを只々喜び感謝致し候。岩手県の花巻町の宮沢政次郎を御存知かいかかを解らず候へども私はその長女にて御座候。今年の三月地方の女学校を卒業さしていただき、又其上重ねて、この都まで遊学を許さる、身と相成り只今は表記の女子大学校予科に学び居り候。物学ばる、嬉しさよりも、先生の御教へに近づき得るうれしさに、望みを以て上京致し候。着京して早廿四日に相成り候へど、今迄何かと取紛れて御伺ひの日の遅延致し候を誠に残念に存じ候。明後日の日曜日は外出日に候へば、何卒御伺ひいたし度きものと御願ひ申す次第にて御座候。さぞや御多忙の御事とは存じ候へど何卒御拝顔御許し下され度く(御奥様なり誰方様なりに)此段切に御願ひ申し上げ候。

常日頃よりの願ひを達して親しく御教へ受くる身となり候はゞ、この上の喜び幸福御座無く候。只感謝奉る外は御座無く候。私は今年十八才の至つて我儘なる者に御座候。我儘なる私を我れから持て余し居り候。はるぐこの地まで遊学いたし乍ら、将来に対する希望を持ち得ず従つて活気なく元氣なく誠に意義なき生活を致し居り候。倦怠に悩まされ候て我乍ら望ましからぬ生活状態に在り候へど、これを脱する程の勇氣も起し得ざる実に情なき私に御座候。何とかして早くこの状態を脱し、積極的なる充実せる生活をなしたきものとは、今この疲れし心に残る只一つの望み願ひに御座候。この様な事は学校の教師等に尋ねべき事、その為の学問ならずやと申さるれば一言も御座無く候へど、厳格なる道徳は、今の余りに弱き私には恐ろし過ぎ候。誠

に我儘この上もなき事を思ひ候へど、病人には山海の珍味を取る先きに薬の方を欲せられ候。何とも傲慢なる言葉に御座候。この心を根本より変へたく思ひ候。捨て得らるゝものならば捨てまほしく存じ候。

誠に失礼なる言葉のみ申し上げ候。御めん下され度く。先づはこことかへすぐも失礼は御容赦の程ひとへに願ひあげ奉り候。

かしこ

四月廿三日

宮沢敏拝

近角先生

御奥様

2 大正四年五月二九日 近角常観宛 封書

《表》市内本郷区森川町一番地 近角常観先生

《裏》五月廿九日 小石川区日本女子大学 宮沢とし

先日は御多忙中の処、いろいろ御世話下さいます、誠に有難う御座います。御話を御さかせ下され、又御馳走にまで預りまして、何と御礼の申し上げ様もございません。只有がたく感謝致すばかりで御座います。今日はまた、此の様なもの御目にかけて、誠に失礼では御座います、何卒御一読下さいます様に御願ひ申し上げます。

失礼な数々はどうぞ御寛恕下さいませ

自分乍ら呆れます程私は我がまゝで勝手で、誠に手の付けようが無いので御座います。が、真を書かうと思ひますと、その我儘も勝手な点も皆さらけ出さねばなりません。何卒、暫く、我儘な勝手な事申しあげますのを御許し下さいませます事。

只今の私の心は光明もなければ希望もなく、動物と余り変らない、或はそれよりも劣つて居るかも知れません。日々無意味に起きて無意味に動き、無意味に寝て、誠にく生き甲斐のない生活をして居るので御座います。仕方なしに生きて居りますようなもの。これならいっそ死んだ方が社会の為には成るかも知れませんが、又死ぬる丈の勇氣も御座いません。

充実しない、空虚な心をもつて生きて居りますのが誠にいやでたまりません。「どうかして、充実さしていただきたい。この意気地ない状態から逃れたい」と時々思ひます。

今の私はどこもかしこも間違ひだらけ、根本からどうにかしなくてはとてもだめであると考へます。

「今の状態をぬけ出でたい。充実したい。」と云ふ欲求も、先生の御講話を伺ひましてから、「あ、これも間違つてる」と思はされました。掴まふくとして居るので御座いますから。

先生に對しまして、「どうにか此の心を変へて下さるようには願ひ致しますの亦、間違ひでは御座いますまいか。「自分が全然間違つた者である。」と云ふ事は解つて居りましたが、自分の力ではどうする事も出来ません。又どうする事もいやな程私は、労働を厭ひ（心身共に）倦怠に悩まされ、不精になつて居ります。

自分にはどこにもよい処がない、間違ひだらけだと思ひますならば、せめて、真摯に聴聞し、道を求めたらよさそうなもので御座いますのに、どこまでも横着な私は、真摯な求道者にも亦成り得ません。

『信仰の余瀝』に依つて御法縁結ばれた御方も御座いますと云ふものを、どうして私はこの様に横着なので御座いませう。「信仰の余瀝」や（ママ）懺悔録」を拝読致しましても、御講話を承りましても、親様の御声も聴かれませんが光りも見えません。

私の心は病み、疲れ、倦んで弱り果てた病人の様で御座います。それ

でありながら与へらるゝ薬をいたゞかうとしないので御座います。すべての努力がいやになり人を見るのもいやになります事が御座います。

どうしてよいかわかりません。人様に向つて求めるのは間違つた事と知りて、先生に、どうか志て下さる事を御願ひ致します。

一旦、故郷を思ひ出しますと、どう志てもこのまゝの意気地ない有様では帰られません。始終たえま無しに案じて下さる父母兄弟、師長を思へば誠に申し訳がなくて、此のまゝでは居られないと思ひます。人の十倍も努力し、勉強して、所謂世間的の立派な者になつて帰らなければならぬ位置にあるのでございます。その理由は、申しあげれば実に長い事になりますが、先生が御聞き下さる事を御厭ひなくば又紙を改めて、懺悔話として聴いていたゞきます時も御座いませう。とにかく、あらゆる心配苦勞を親にかけ、親を涙させるような事をして、三月の末、或る意味の敗北者として、故郷を離れ、のがれて参りました。どうしても、その恥を雪ぎます為に、又親師長の心配に報ひる為にも私は、勉強して、成業の道に進まなければならないので御座います。

この様なブラくな無意義な生活は一日も早く一刻も早く捨てる様にしていたゞき度いで御座います。学生でありながら、とかく学業も怠り勝ち、こんな事でどうして故郷へ帰られようと思ひつゝ、勉強する努力が出来ないので、誠に情無いとも何とも、申し様が御座いませぬ。そして、「心を充実させてから、勇氣に充ちて勉強もいませう。自然に努力も出て来るかも知れない」と云ふ様な、あてのない勝手な事をあてにしたりして居ります。そして、どうにか成る道を構せず、「どうにか成りたい」と望んで居るなどは誠に無理千万な事と我れながら呆れます。

原動力のない機械の様に、成るまゝにならうと思ひましたりして、ほ



んとに、自己に不忠実な事此の上も御座いません。その不忠実な例と致しまして、

当校の主義は自動自発、研究的、人格の向上、修養、目的ある生活、など、云ふ言葉を厭になります程聞かれます。当校の先生方を見ますと、「犠牲の精神」とか「愛」とか云ふものに生きて、死の問題をも解決されてる様に見える先生もあるように見受けられます。

一層の事この学校を批評的に見ず、自分もその中に同化してしまふか、など、も思ひました。然し、同化する迄の努力がいやなので御座いますから、何とも仕様のない次第で御座います。

尚不忠実な事は、此段、物質の為に心を囚へられる事が多くなつた様で御座います。自分の精神からは何の快樂も得られませんから、自然、五官から受ける快樂を欲する様になりました。

そして、こういう情無い私である、どうにか成らなくてはならぬ、などと思ふ矢先きに、故郷から少し情の籠つた手紙でも参りますと、それに紛れて、忘れてしまひましたり、誠に、不忠実な例は沢山ございます。

然し、この様に学校に同化しようと思ひましたり、物質に走らうと致しま志たり、はかない一時の喜びに依つて紛らさうと致しましたりしますのは、みんな、真の私の心の要求では御座いません。どうにもならない余り、気まぐれに、そんな不忠実な事を思ふので御座います。いろいろな勝手な独り言を秩序もなく並べ立てまして、誠に御申訳御座いません。

永いく昔から、この私故に御苦労して下さる御仏ありと伺ひましても、私の事とは、思はれません。印度の昔に起つた事として、私とは全く別の事の様な気が致します。信仰ある御方から御らんになりましたら、まことに私は、悪魔外道で御座いませう。

この様に、生き甲斐のない生活をして居ります事を、書面に書いて送つたとは、思ひませんが、先日、の便りに、父からいろいろ精神的の事が書いて御座いました。弱い汚ない今の心はすっかり追ひ出してしまはねばならぬ、心の主人を入れ替へていたゞく時に始めて、弱い者も強くなり、汚れたものも清まるであらうと云ふような意味が御座いました。「何ものかに依つて心を充たされ、真実の意義ある生き生きした生活をする様に早くなり度う御座います。」この希望、願ひが少し熱烈ならば、少しは私も取り所があるかも知れません。然し時々しか心に浮ばないので、他の大部分の時間は、紛れたり、忘れたりして居るのですから、誠に、困り切つた者で御座います。

この希望を実現する道程として、一旦、苦しまねばなりませんものなら、苦しむ事は余り好みませんけれど、苦しむ事を絶対に避けは致しません。徹底した苦痛も味へませんから喜びも得られないでせう、と存じます。

間に合せの、ごまかしの日暮しをして、自分は何にも出来ないのだ、と思つて、道を求めようと致しましたり、どうにか成るかも知れないと思つて、求道を忘れましたり、こんな私は、もうどうとも仕様のない者であると思ひます。

求道の志、切でない熱心でない者、これでも先生はどうかして下さる事が出来ますでございませうか。

何だか自分ながら、少しもまとまらぬ事のみ申し上げました。誠に何とも相済みません。御許し遊ばして下さいませ。

学校の仕事も沢山おくられて居りますのを打ち捨て、毎週の日曜には御伺ひ致しましても、今迄私は、どう変つたか私には解りません。

明日又、冷笑されるのを忍んで明日は参上いたします。然し、どうにも成らないと知りましたなら、(先生の御講話を御伺ひしても、私には何も力を得られないと) 今度は仕方がございせんから、向上と

か何とかおっしやる先生に依って、当って見ようかとも思ひます。これは、私の本意ではなく、本心の叫びでない事は勿論でございますが：失礼な事ばかり申しあげました。何卒御容赦下さいませ御願ひ申しあげます。

寮舎生活は、手紙も余り自由には書く事を許しません。幾度か中止しようとし、書きなほして、やっとこんなものが書かれました。

明日、何卒御多忙で御座いませでしたら、御話を御伺はせ下さいませ。

先づは、くどくと、訳のわからぬ事を、御許し下さらん事を御願ひ申しあげます。

五月廿九日

宮沢敏拝

近角先生

御奥様

御許し

### 解題

#### 一 近角常観について

近角常観は、明治後期から昭和戦前期にかけて活躍した、真宗大谷派の僧侶である。明治三年四月、滋賀県東浅井郡朝日村の西源寺に生を受け、父・常隨の死去の後に同寺の住職に就任。昭和十六年十二月に没するまで自坊の門徒を指導した。一方で彼は、東京帝国大学に在籍時の明治二十九年、清沢満之（一八六三—一九〇三）らが主導した大谷派宗門改革の試みである「白川党」の運動に参加し、その後も前近代的な寺檀制度の枠内に収まらない躍動的な布教活動を推進した。

大谷派本山からの命による欧米視察からの帰国の後、明治三十五年に開設した学生向けの寄宿舎である「求道学舎」（東京本郷区森川町）や、その隣接地に大正四年に建立された説教所である「求道会館」において、学生をはじめとする多くの信徒の教化にあたった。また日本全国を遊説し、さらに雑誌『政教時報』『求道』『信界建現』を発刊することで、旺盛な伝道／言論活動を展開し、広範な支持者を獲得した。

近角の教えは、『歎異抄』を中核的な典拠としつつ、親鸞精神の現代的な意義を信徒に説き、彼ら個々人の内面に強固な信仰心を覚醒させることを目的としていた。自らの青年期における煩悶の過程と、その後信仰を獲得したことによる煩悶からの脱却の体験を繰り返した語った近角の説教は、似たような悩める自我を抱えた当時の若者たちの心をつかみ、多くの追隨者を生んだ。その影響力の大きさは、同時代的にはキリスト教界における内村鑑三（一八六一—一九三〇）に匹敵するほどのものがあつたとも言われている。

真宗の説教の価値を、既存の宗門教学のくびきから解き放ち、現代人に伝えることに尽力した点において、近角は同宗門の先輩である清沢や南条文雄（一八四九—一九二七）や村上専精（一八五一—一九二九）、後輩である暁烏や多田鼎（一八七五—一九三七）などと志を同じくした。とりわけ、近角が洋行に出ている間、留守中の居住地をまかされた清沢とその弟子である暁烏らが同地に私塾「浩々洞」を開き、しばしのあいだ滞在していたという事情もあり、この清沢一派と近角との間には浅からぬ縁があつた。近角が毎週末に開催していた「日曜講話」の講師として浩々洞のメンバーが招かれたり、地方伝道の際に両者が同行したりするなど、東京を拠点とする先進的な真宗者として両者の交流と協力は盛んであつた。それは彼等の信徒に関しても同様に言えることで、近角の求道学舎・会館と浩々洞の双方を訪れ教えを請う者や、近角による信仰雑誌である『求道』と浩々洞の同

人が手がけていた『精神界』とを共に購読する信徒は、少なくなかった。

## 二 宮沢一族と近角常観

現在わかっている限りでは、宮沢一族と近角常観との最初の接触は、明治三十七年の八月に大沢温泉で開催された夏期講習会の場においてである。この講習会は、政次郎ら花巻の知識人や学生が中心となり明治三十二年に初開催された、仏教研鑽と精神修養を目的とした毎夏恒例の勉強合宿であり、講師として暁鳥を筆頭とする多くの真宗者が招かれていた。<sup>5)</sup>

この年に近角が講師として招聘されたのは、既に新進気鋭の真宗僧侶として仏教関係者の間では有名であったことに加え、政次郎とともにこの講習会の手引き役として活躍していた波岡茂輝、鈴木卓苗、佐々木哲郎（一八八二—？）らが、当時の求道学舎の生徒であり近角と顔なじみであったことも、大きなきっかけとなっていた。会の直前に発行された『求道』誌によれば、

近角氏は八月初旬より中旬まで岩手県大澤温泉夏期講習会に出席の筈に候。こゝは盛岡市をさる南方十里の山地にして、遠く塵寰を脱し所謂桃源洞裏にあり。従来この種のさゝやかなる会をいとなみ来りたる由に候。尚仙台よりは文学士三好愛吉ものぞまる、筈に候。学舎の波岡茂輝、鈴木卓苗君等幹旋すべく候。<sup>6)</sup>

ということであり、先行研究においても、この第六回夏期講習会は八月五日から十四日まで開かれたとされている。<sup>7)</sup>他に釈宗活も講師として招かれており、近角は歎異鈔を講じたらしい。同年の講習会に集った参加者の熱意には相当のものがあつたらしく、近角は大沢温泉に滞在中、求道学舎に住んでいた百目木智理に宛てて、自己の著書を計四二部、至急郵送してほしいとの手紙を送っている。

政次郎の書簡1は、この夏期講習会の終了の直後に書かれたものである。趣旨は、近角が主催していた雑誌『求道』のバックナンバーをまとめて購入したいということであった。政次郎はおそらく講習会の場で初めて接した近角の人柄や説教に魅力を感じ、その著述に触れることを希望したのであろう。宛名は「求道発行所」となっており、未だ他人行儀な印象を受けるが、しかしこれから近角に師事していこうという意思は、この時の政次郎のなかには既に存在していたものと思われる。

おおよそ二年後の明治三十九年四月、政次郎は妻のイチ、およびその父・善治や弟の直治と磯吉、妹のセツとともに求道学舎を訪れ、日曜講話と、その後に行われた信仰談話会——近角が信徒と膝をつき合わせながら真宗の教えを語り合い、また各自が自らの信仰の現状を告白するための会合——に参加している。<sup>8)</sup>その直後に発行された『求道』誌には「大沢講習会にて結縁せし強健なる信仰を实践せる宮澤政次郎君は来京し、宮澤梅津両家一族七人熱心に、求道して余念なく、仏智不思議の御はからいひは悉く自力の立場を翻へして念仏無碍の一道の力を実現し来る」という記述があるが、上記の六人に加え、セツの夫で、この時は来京しなかったが既に入信していた梅津善次郎を加えた七人を、近角は宮沢一族における自己の信徒として数え上げたのである。なお、さらに後の六月の談話会には、善治の次男・恒治も顔を見せている。この年、宮沢一族から多くの人々が、近角の教えに触れるためにやって来たのである。

宮沢善治・直治・磯吉の父子連名による明治四十三年の年賀状「図1」や、梅津善次郎・セツ夫妻からの明治四十三年および大正八年の年賀状は、この来京の際に確認された法縁の延長上に位置づけられるだろう。年賀状ということもあり、いずれもごく定型的であまり特徴はないが、彼等と近角との付き合いが親族ぐるみであったという事情

は、これらの書簡からも十分に認めることができるだろう。

以上の面々のうち、善治の三男・磯吉のみは、この後も明治四一年に至るまで、談話会にたびたび顔を出している。彼はこの時期、慶応の普通部に通学するため、求道学舎に入舎していたのである。政次郎を除けば、宮沢一族のなかで近角と最も親密な付き合いがあったのは、この磯吉であったといつてよい。大正三年発行の『求道』には、神経を病んだ彼が近角のもとを訪れて教えを受け、改めて信仰に目覚めることができたという趣旨の書簡が掲載されており、また彼の書簡1〔図2〕のような近況報告や、昭和十四年の書簡3に見られる、自分の息子を夏休みのあいだ学舎に宿泊させてほしいといった請願からも、彼と近角とのつながりの強さは感じられる。磯吉の東京留学時代から近角が没する昭和一六年に至るまで、両者は師弟としての関係を維持していたのだろう。

政次郎が妻の親兄弟を引きつれ学舎を訪問してから約二年後の明治四十一年五月、政次郎は再び来京し、近角と面談している。その後に御礼の挨拶のために書かれたのが、政次郎の書簡2である。そして続く六月二十九日（書簡3）と八月八日（書簡4）には、近角の弟であり、兄の片腕としてその宗教活動を熱心にサポートした近角常音（二八八三―一九五三）に宛てて、八月十三日に予定されている近角の花巻伝道に関する連絡があった。書簡4〔図3〕によれば、十三日の午後から光徳寺で二席の講演を行った後、直治のもとに宿泊するという段取りであったらしい。直近の『求道』誌には「同年夏季の第三期伝道は東北及北海道方面なり先づ翌十三日の午前九時を以て陸中花巻に着し、久振りにて同地御同朋と会して宿縁の深厚なるを感謝し奉り」という記述があり、また同月二十五日付で政次郎が暁烏に宛て送付した書簡には、「過日も近角師半日御来花の節に種々御話もせられ候」とあるから、この花巻伝道は確かに実現されたようだ。その

後も政次郎は近角に対し、明治四十二年（書簡5）、同四十三年（書簡6）、大正二年（書簡7）とほぼ毎年のように年賀状を送っている。

大正四年四月、政次郎から近角のもとに、娘トシが東京の女子大学（日本女子大学）に入学したので、「精神方面ノ修養」の指導についてよろしく頼む、といった内容の書簡8〔図4〕が届く。ここで言及されている「親戚ノ者」とは、政次郎の叔父の末娘・はるのことで、トシは先に同女子大に在籍していたこのはると同じ女子寮（責善寮）に入ったのであった。政次郎は、この様な親戚のつてがあったとはいえ、家族から離れ東京の学校寮で暮らし始めた娘の身をひどく案じていたのだろう、東京在住の信頼できる師である近角に、娘のことを気遣ってくれよう懇願する手紙を書いた。なお、同書簡の追伸にある「妹」とは、明治三十九年九月二十九日に岩田金次郎のもとに嫁した、政次郎の妹・ヤスのことである。

トシは、同年の四月と五月、近角のもとに二通の書簡を送っている。四月二十三日に書かれた書簡1〔図5〕では、女子大入学のため上京してきたという経緯とともに、父親をはじめとする親類の多くが尊崇している近角のいる東京に住むことができたことに、大きな喜びを感じていること、また現在自分は激しい倦怠感に苛まれており、この辛い状況を脱するための「薬」を欲していること等が述べられ、そして週末に近角のもとを訪れる予定であることが告げられている。彼女はその後、実際に求道学舎を何度か訪れ、近角の講話を聴いたり、悩み

の相談に乗ってもらったりしていたようである。トシの書簡2〔図6〕は、それから再び五月二十九日に書かれたものである。はじめに前回来訪時にお世話になったことへの御礼が述べられた後、自分が相変わらず倦怠と苦悩の状態から抜け出せないでいること、そして近角「先生」の話を傾聴し著書を読んでも、自分はいっこうに救われることがなく、仏の存在も実感できずにいる、という現

在の心境が語られる。一般に、近角のもとに送られる書簡には、近角が説く仏教の素晴らしさを賞賛するものや、自分を信仰の世界へと導いてくれた近角に対する感謝の言葉を述べるものが多いなか、この書簡の中でトシが記しているような、信仰の受け入れられなさをテーマとした文章は、やや珍しい部類に属する。

さらに彼女は、今後も近角のもとでは悩みが解消されないようであれば、今はまだ馴染めないでいる女子大の校風や精神的な指導に身を任せるつもりでいる、と示唆している。そして、この後の彼女は、成瀬仁蔵（一八五八—一九一九）の教育理念に基づくその日本女子大の世界観への適応を試みていったとされている<sup>17</sup>。同年六月には、政次郎から近角に対し、「我儘な子に候間此上とも御教訓の程本願上候」という再度の依頼があったが（書簡9）、基本的にこれ以後、トシは近角とは一定の距離をおくようになったものと思われる。求道会館に残されている「信仰談話会」の参加者名簿には、同年の五月三十日のところに「宮沢敏」の名前が記されているが、その後、彼女の名前は一度も出てこない。

翌年（大正五年）の四月、政次郎は近角に、「会館落慶ノ御記念トシテ上人御真蹟」を寄贈してもらったことへの御礼の手紙（書簡10）を書いていいる。求道学舎とともに近角による布教活動の拠点となった求道会館は、大正四年十一月に落慶されたが、政次郎もこの会館の建立に際し寄付金を提供している<sup>18</sup>。その返礼として、政次郎のもとにも近角から記念品が贈られていたというわけだ。

次いで同年五月十五日にも、近角宛の手紙（書簡11）が執筆された。前日に近角が花巻を出立した際、見送りに出損ねて申し訳ない、またその際に花巻の人間（「老人と病人」と表現されているが、誰かは不明）が近角に「御揮毫」を願ったことについても、お許しを願いたい、といった内容である。他に傍証となる資料はないが、この時にも近角

は花巻伝道を行っていたのだろう。明治三十七年八月と明治四十一年八月の来訪に続き三度目となる。現在わかっている限り、この三回が、近角が花巻を訪れたすべてである。

最後に、時はかなり流れて昭和十四年の元旦、近角一家に宛てて政次郎からの年賀状（書簡12）が送られてきている。この前後の空白を埋める資料は見つかっていないが、おそらく政次郎と近角との間には、後者が没するまでは少なくとも、年賀状をやりとりするぐらいの付き合いは持続していたものと推測される。

以上に紹介してきた近角宛書簡は、時期により集中的に残されている時期のものとそうでない時期のものとの偏りがあり、本来はもっと多くの関連する書簡が存在していたであろうことが想定できる。また、今回対象とした求道会館から見つかった資料以外にも、近角の親族のもとには別種の資料が残存している可能性があり、その調査次第ではさらなる新資料の発見も期待される。

### 三 今後の研究の展望

最後に、今回の書簡発見がもたらす研究上の意義について以下に明らかにしていきたい。その意義は少なくとも以下の三点から考えることができる。すなわち第一に、宮沢一族の真宗信仰の実態解明、第二に、トシの精神的状況と賢治との関係の解明、第三に、賢治の思想を広い近代日本精神史の中で捉える可能性である。

【宮沢一族の真宗信仰】。本研究が発掘した書簡は、宮沢一族の真宗信仰のあり方の解明に資するものである。従来、賢治が法華経信仰に転じる契機となった『漢和对照妙法蓮華経』の編者、島地大等（一八七五—一九二七）や、政次郎発信の書簡が翻刻されている暁鳥敏について、栗原敦の研究をはじめとしたすぐれた研究がなされてきた<sup>19</sup>。それに加えて、このたび近角と宮沢一族との関係が明らかになったことで、宮

沢一族の真宗信仰のあり方がより具体的な姿として現われてきたのである。

島地、暁鳥、近角はいずれも伝統的な真宗教団に根差しながらも、近代に相応した形で真宗理解を提示した。近角らの信者の中心をなしたのは知識人青年であったが、青年たちは、たとえ特定の教団や寺院に属していても、自発的な意志で求道し、近角らの書物を読みその説教を聴聞したのである。このような青年たちが真宗に求めたのは、儀礼や組織ではなく、自己形成に資する信仰であった。重要視されたのは、各人の内的覚醒であり、そのため、内的覚醒が生じない場合には、求道から離れることが当たり前のようになっていった。宮沢一族において、磯吉が近角に親近し、トシや賢治が近角から遠のいていったのはその典型的な事例である。このように、今回の書簡の発見で宮沢一族の信仰の内容も鮮明になったのである。

さらに、宮沢一族と近角と暁鳥とをめぐると新たな具体的な関連もいくつか浮き上がってきた。暁鳥の明治三十九年夏の花巻行きは、この年の四月十八日に、政次郎が在京の暁鳥を訪れたことから始まった。<sup>20</sup>ところが、先に示したように、政次郎一家はこの四月に近角のところまで聞法していた。暁鳥は明治三十六年の春から明治三十七年末まで、すくなくとも計五回、近角の信仰談話会に参加していることが、求道会館に残されている「求道学舎 信仰談話会名簿」からわかる。三十八年以降、暁鳥が参加したという記録はないが、この時期、近角と暁鳥は密接な関係にあった。また、政次郎とともに暁鳥を訪れた佐々木哲郎はこのとき常観の求道学舎に寄宿していた。明治三十九年四月九日の暁鳥の日記から、百目木宅で近角と会い、その日に佐々木哲郎に手紙を出していることがわかる。<sup>21</sup>おそらく、近角を紹介者として佐々木と政次郎は暁鳥に会ったのではないかと推察できる。さらに、明治四十一年六月二日付けの政次郎発の書簡が、近角宛にも暁鳥宛にも残

されている。<sup>22</sup>二つの書簡の内容から、政次郎は在京中に近角と暁鳥の両者に面談し、教えを聞いていることがわかる。政次郎は暁鳥と近角の両者に親近していたのである。

【トシと賢治の信仰】。トシが真宗の信仰を有していないと表明している手紙の発見は実はこれがはじめてではない。トシの父方の祖父喜助宛の大正五年六月二十三日付けの手紙から、トシの信仰が確立されていないことを読み取ることができたはずであった。<sup>23</sup>この手紙でトシは、仏教の立場から喜助に因果応報を説き反省を促しているものの、トシ自身は「私も未だ信仰を持ってない事」を表明し、「未だ確かな信心」がなく「一緒に信心をいただく」ようにしようと述べているからである。ところが、この表明の意味は深く考察されてはこなかった。この表明からトシが宗派を越えた信仰を求めていたと解する研究者もいた。<sup>24</sup>しかし、近角宛の手紙と重ね合わせるなら、トシは真宗の信仰を求めようとしているが、いまだそれが獲られていないと表明していると考えざるをえない。この時期、トシは「空虚な心」を抱え、その空虚さが真宗の信仰によって埋められないことに悩んでいたと判断されるのである。そして、この精神的空白は賢治にも伝えられていたに違いない。

賢治が真宗から法華経の信者へと移った経緯についてはこれまでも相当の研究がある。その中で、小倉豊文の研究は、賢治が真宗聖典を親友に送った時期などさまざまな事実を詳細に検討したもので、説得力がある。小倉の研究にもとづけば、賢治の真宗信仰の否定と法華信仰への転換は、大正六年五月一日から、大正七年二月二日の間に行われたと推定される。<sup>25</sup>ただし、この転換がどのようになされたのかは、「ブック・ボックス」だと小倉は表現する。

大正七年十二月に、賢治はトシの看病のために上京する。【新】校本宮澤賢治全集』の年譜篇大正八年一月二十二日の項には、賢治が本

郷区森川町の求道学舎に近角常観を訪れたと記載されている。この記載は、賢治の政次郎宛葉書（一月二十二日発）の文面、「説教演説等有之候のときは聞きに参るべく候間格別御紹介にも及び申さず候」に対応したものである。賢治の文面から、政次郎が賢治に真宗の説教の聴聞を勧めたことが推察できる。政次郎が紹介しようとしたのは、人間関係からいっても、また賢治の滞在先である雲台館（現、文京区目白台三丁目四七）との距離関係からいっても、近角が筆頭におかれていたにちがいない。賢治が近角を訪れたという記載は、すでに堀尾青史が作成した一九七七年刊行の『校本宮澤賢治全集十四卷』の年譜に存在している。ただし、賢治が近角を訪問したことに関する直接的な典拠は不明である。おそらく、堀尾がなんらかの情報を得て年譜に記載したものと思われる。実際に、どう賢治と近角とが関わったのか、その詳細はいまだ不明な点が残されているが、いずれにしてもその後、賢治は国柱会館で田中智学の演説を聞き（二月十六日）、いっそう法華行者として活動するようになっていった。

周知のように、賢治もトシも家業を嫌い、有意義な将来を望むという点で共通の悩みを抱いていた。そして、賢治が法華経の行者になったとき、トシはいち早く賢治にしたがったとされる。さらに、トシの死を悼む「無声慟哭」では、「信仰を一つにするたつたひとりのみちづれ」とさえ賢治は表現している。賢治とトシとの密接な関係を鑑みれば、両者には賢治からトシへの一方的感化だけが存在したのではなからう。トシの中に存在していた精神的空白に賢治が呼応したという面も認められるべきである。従来は、真宗信仰に関するトシの苦悩を明確にする十分な資料を欠き、トシの精神的空白の中身が判然としなかったため、この面の研究が進捗しなかった。しかし、このたびの書簡の発見で、トシの精神的空白の状態が判明した以上、今後は、そのような面を踏まえたうえで、賢治の「ブラック・ボックス」の解明を

試みる研究がなされなければならないと思われる。

【近代日本精神史の中での賢治】。賢治の思想はすでに多彩な観点から論じられている。だがさらに、近角という観点をいれることでより広い精神史の文脈で賢治の思想を捉える可能性が広がってくる。近角のところには、様々な分野に属する多くの人材が出入りしていた。その人名をごく簡単に記せば、文学者では、伊藤左千夫（一八六四—一九一三）が『求道』に定期的に投稿していた。また、私小説作家として著名な嘉村磯多（一八九七—一九三三）は近角に親近していたが、このたびの調査で嘉村発の書簡が二通発見された。後に右翼思想家となる歌人、三井甲之（一八八三—一九五三）の書簡は十二通見つかっている。また三井は近角の主宰する信仰談話会にも頻繁に参加していた。木村・相良の連名でドイツ語辞書を編纂したことで有名なゲーテ学者、木村謹治（一八八九—一九四三）も熱心な信者であった。そして、その弟で生化学者の木村雄吉（一九〇四—一九八九）は、近角の次女勝子と結婚し、常観・常音死後の求道学舎を守った。さらに著名人では、哲学者三木清（一八九七—一九四五）が近角の説教・書籍に感銘を受け、晩年には『親鸞』に関するメモを残している。日本精神分析学会の初代会長である古澤平作（一八九六—一九六八）は、近角の熱心な信者であったが、古澤の思想形成に近角は大きな影響を与えた。その影響は、古澤の弟子である小此木啓吾（一九三〇—二〇〇三）の阿闍世コンプレックス論や土居健郎（一九二〇—二〇〇九）の「甘え」論にまで及んでいる。

賢治との関係で注目すべき人物としては、谷川徹三がいる。一高生時代に谷川は、近角のところへ熱心に信仰を求めた。精神的に悩んだ谷川は、近角に求道学舎での寄宿を懇願し、そこで二年ほど生活した。しかし、谷川は結局、真宗の信心を獲ることはなく、ホイットマンの『草の葉』を読み、大きな安心を得たという。その後、谷川の関心は

芸術にうつり、芸術との関係の中で宗教を理解しようとした。近角の説いた真宗世界を断念した谷川が、近角的真宗の世界を離れた賢治に共鳴し、それを紹介したことは偶然ではなからう。近角が谷川や賢治に直接に影響を与えたとはいえない。また谷川の賢治理解は一面的なものであったらう。しかし、近角の教説で満足できなかった二人の思想世界が共鳴しあい、その共鳴が多くの読者の獲得につながったといえる。

このように近角と関係を有した人材は、日本の近代精神史の様々な分野で活躍した。今後、このたび発見されつつある資料をもとに、賢治の思想がさらに新たな文脈において考察される可能性が開かれると思われる。

【付記】本論文は、岩田文昭を代表とする科研究の成果の一部である。この研究は、碧海寿広・大澤広嗣・小田晃生と協力して作業をなしたため、本論文にも共同作業によってえられた知見が随所にいかされている。ただし、本論文の文責は、「緒言」「翻刻」と「解題」の「一 近角常観について」「二 宮沢一族と近角常観」に関しては碧海寿広にあり、「解題」の「三 今後の研究の展望」に関しては岩田文昭にある。翻刻に関しては、不慣れなため思わぬ間違いがあるかもしれない。そのような点をご指摘いただければ幸いである。また、雑誌『求道』はすでに全巻電子情報化してDVD一枚に収めている。求道会館に所蔵されているその他の資料を含めて、御関心のある方は、岩田までメールなどたまわれれば幸甚である。iwata@cc.osaka-kyoiku.ac.jp 求道会館所蔵の資料に関しては、会館の管理責任者である近角真一氏から全面的な協力をえた。また、宮沢和樹氏・明裕氏には資料の使用に関してご理解をいただいた。記して、感謝申し上げたい。なお、本論文の主旨は、「イーハトーブ〈宗教学〉 近角と賢治」という

題のもとで『宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報』第四〇号、二〇一〇年に発表されている。

#### 注

- (1) 栗原敦編注「金沢大学暁烏文庫蔵 暁烏敏宛 宮沢政次郎書簡集」〔『金沢大学文学部論集(文学科篇)』一号、一九八一年)。
- (2) その研究成果の一部として、『近代化の中の伝統宗教と精神運動―基準点としての近角常観研究―』平成二〇年度～平成二一年度科学研究費補助金(基盤研究(C)) 研究成果中間報告書』二〇〇九年がある。
- (3) 信心獲得以後と思われる文面からして、大正三年より後のものか。
- (4) 近角帰国後、浩浩洞は本郷区東片町に移り、またその後も巢鴨や小石川など所在地を転々とした。
- (5) 栗原敦「序景 宮沢賢治」〔『宮沢賢治 透明な軌道の上から』新宿書房、一九九二年)。
- (6) 『求道』第一巻第六号、一九〇四年、三七頁。
- (7) 栗原前掲、二八―九頁。
- (8) 「求道学舎 信仰談話会名簿」(求道会館所蔵資料より発見)に名前の記述がある。
- (9) 「時報」〔『求道』第三巻第四号一九〇六年〕一六七頁。
- (10) 注8の名簿によれば、磯吉は談話会に計七回参加している。
- (11) 大正二年一月に作成された「求道学舎生名簿」(求道会館所蔵資料より発見)には、現役 of 学舎生の所属する学校と出身地、および学舎生OBの現職・現住所について記されており、磯吉については「二校 仙台市第二高等学校 陸中国花巻川口町 宮澤磯吉」という記載がある。



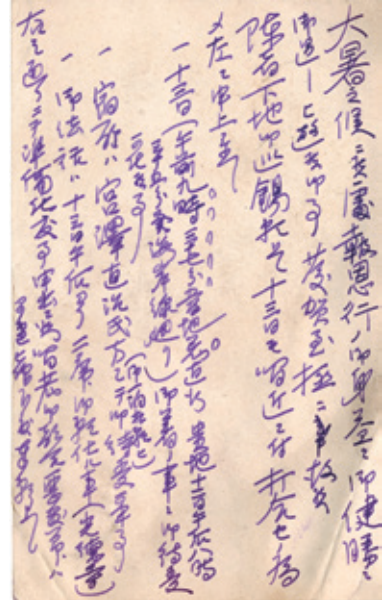
- (12) 宮沢磯吉「信仰近信」(『求道』第一一巻第四号、一九二四年)。
- (13) 「時報」(『求道』第八巻第五号、一九二一年)三五二頁。
- (14) 注1の前掲書簡集、八一頁。
- (15) 青木生子「宮沢トシ」(『近代史を拓いた女性たち—日本女子大学に学んだ人たち』講談社、一九九〇年)一八四—一五頁。
- (16) このトシの東京留学の理由として、彼女が花巻高等女学校に在籍時、同校の音楽教師との間で「恋愛事件」を巻き起こし、このために両親をはじめとする関係者に多大な迷惑をかけたこと、そしてその汚名を返上するためにこそ、生地から離れ、勉学による立身を志していたという事情があった。この「恋愛事件」の詳細については、山根知子『宮沢賢治妹トシの拓いた世界』朝文社、二〇〇三年を参照。また、トシの二通目の書簡にも、この辺りの事情についてはやや暗示的に触れられている。「:あらゆる心配苦勞を親にかけ、親を涙させるような事をして、三月の末、或る意味の敗北者として、故郷を離れ、のがれて参りました。どうしても、その恥を雪ぎます為に、又親師長の心配に報ひる為にも私は、勉強して、成業の道に進まなければならぬので御座います」。
- (17) 山根、前傾書。
- (18) 明治三十八年に五円(『求道』第二巻第五巻)、同三十九年に五円(『求道』第三巻第五号)、同四十一年に五円(『求道』第五巻第九号)、同四十二年に五円(『求道』第六巻第三号)、同四十五年に十円(『求道』第九巻第一号)をそれぞれ寄付している。なお、善治と直治も、明治三十九年にそれぞれ十円の寄付を行っている(『求道』第三巻第五号)。
- (19) 注4の栗原前掲書。
- (20) 同書、十二頁。
- (21) 『暁烏敏全集 第二六巻』涼風学舎、一九七六年、四七一頁。
- (22) 前掲、栗原敦編注「金沢大学暁烏文庫蔵 暁烏敏宛 宮沢政次郎書簡集」。
- (23) 堀尾青史編「宮澤トシ書簡集」『ユリイカ 7月増刊』第二巻第八号、一九七〇年。堀尾はこの手紙の年を大正六年と推定しているが、山根知子が指摘するように大正六年ではなく、大正五年が正しいと判断される。山根、前掲書、九七一—八頁。
- (24) 山根、同書、五十頁。
- (25) 小倉豊文「二つのブラック・ボックス」、一九八二年(大島宏之編『宮沢賢治の宗教世界』溪水社、一九九二年所収)。
- (26) 遺稿『親鸞』に至る三木の思索の歩みと、近角を善知識とした宗教哲学者、武内義範に関しては、以下の拙稿で論じた。「三木清における〈宗教〉」『西洋哲学との比較という視座から見た日本哲学の特徴およびその可能性について』(平成十九—二十一年度科学研究費補助金研究成果報告書)(研究代表者藤田正勝)二〇一〇年所収。
- (27) 小此木啓吾や土居健郎の思想理解と近角の関係は、拙稿「阿闍世コンプレックスと近角常観」、『臨床精神医学』第三八巻第七号、二〇〇九年参照。



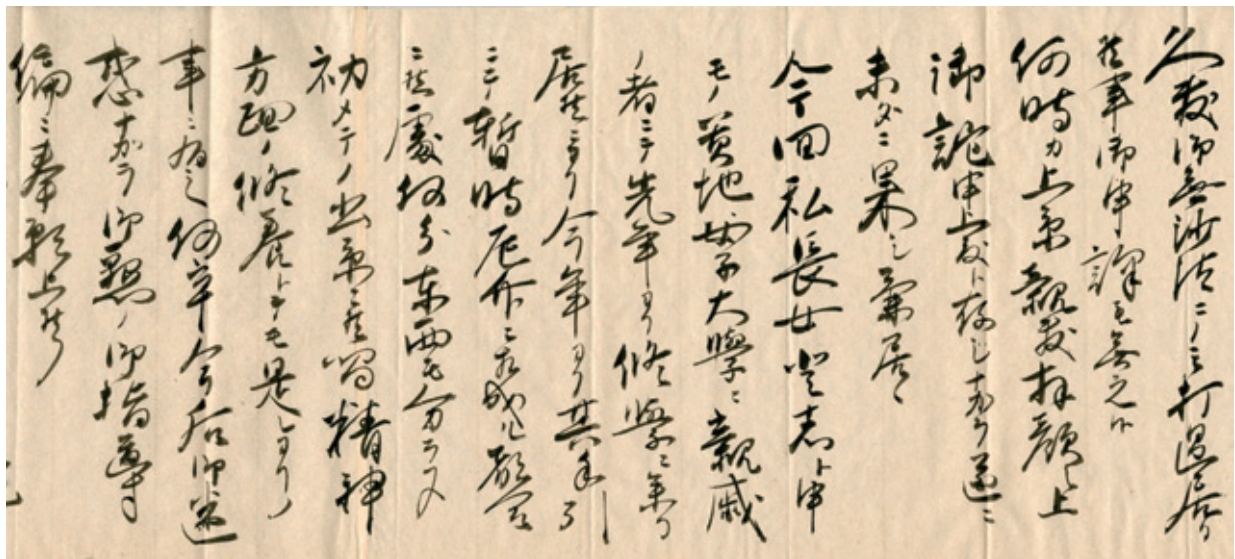
[図1] 善治ほか書簡  
明治43年1月1日



[図2] 磯吉書簡  
?年4月9日



[図3] 政次郎書簡  
明治41年8月8日



[図4] 政次郎書簡 大正4年4月2日



MIYAZAWA Kenji and CHIKAZUMI Jokan  
—Reading the Letters of the Miyazawas

IWATA Fumiaki\*, OHMI Toshihiro\*\*

*\*Department of Social Science Education, Osaka Kyoiku University,  
Kasiwara, Osaka 582-8582, Japan*

*\*\*International Institute for the Study of Religions*

There was a close relationship between the family of MIYAZAWA Kenji and CHIKAZUMI Jokan, a priest of the Otani sect of Shin-Buddhism. Twenty letters from the Miyazawas were found in the Kyudo-Kaikan, Chikazumi's missionary center. Two letters from Toshi, a younger sister of Kenji, were especially important since she confessed she could not follow the doctrine of Shin-Buddhism. When Kenji became a follower of *The Lotus Sutra* after abandoning the doctrine of Shin-Buddhism, it was Toshi who immediately followed and supported him without hesitation. These letters reveal an aspect that Toshi's mental void affected Kenji to some extent rather than the supposition Kenji led Toshi in confirming her faith.confession

**Key Words:** Shin-Buddhism, *The Lotus Sutra*, confession, Young Intellectuals